幸福

幸福

宇野千代著

文藝春秋刊

幸福　奥附
昭和四十七年十一月二十五日　第一刷
昭和四十八年四月二十日　第三刷
著者　宇野千代
發行者　樫原雅春
發行所　株式會社文藝春秋
東京都千代田區紀尾井町三番地
郵便番號一〇二
電話東京(〇三)二六五局一二一一
印刷　圖書印刷
製本　中島製本
製函　加藤製函
定價　七百八十圓
萬一落丁・亂丁の場合はお取替へいたします
© Chiyo Uno
1972
Printed in Japan

0093—302590—7384

〈幸福〉目次

幸福　五
水の音　三一
貞潔　四三
この白粉入れ　七一
野火　一四三
行く　一六一
いま見るとき　一七一

装幀　村上芳正

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

幸福

宇野千代作品集

幸福

I

いつでも一枝は風呂から上ると、ちよつとの間、鏡の前に立つて、自分の裸の體を見る。タオルを當てて、少し腰をひねるやうに曲げて立つてゐる。ぽつと赧らんだ肌をしてゐる。「似てる。」と思ふ。ボッチチェリのヴィナスの繪に似てると思ふ

のだ。足もとに貝殼がないだけで、ポーズが似てゐる。ほんの少し膨らんだ腹の形も、兩足の形も似てゐる。かう書くと、それはながい間、自分の體に見惚れてゐるやうに聞えるが、さうではない。ただ、似てゐると思ふだけで、すぐに着物を着て了ふ。

しかし一枝は、自分の裸の體がヴィナスのやうだと、しんから思ふ譯ではない。七十歳をとうに越してゐる體が、ヴィナスのやうである筈がない。ひよつとしたら、少しは斑點があるかも知れないし、肉のおちてゐるところもある。しかし一枝は眼がよく見えない。その上、湯氣の中で視點が定まらない。一枝はそのことを、幸福の一つに數へる。

一枝はかうして、幸福のかけらを一つ一つ拾ひ集める。自分の周圍にそれを張り遶らして生きてゐる。人にはをかしく思はれることでも、自分では幸福と思ふやうにした。一枝は五年前に良人と別れた。そのとき、別れるのを辛いと思はないやうにしたいと思つた。一枝は自分でも別れるのが好いと思ふやうにした。良人が荷物

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

をまとめてゐるのを、何となく手傳つたりした。それが自然に出來たと思ふ。

良人は別のところで齡の若い女と暮すやうになつた。一枝はその女を見たことはない。しかし、良人がながい間その女とつき合つてゐたと言ふことで、その女がどう言ふ人か分るやうな氣がする。良人が一枝と別れて、その女と暮すことは當然である、と一枝にも思はれる。一枝が良人と一緒に暮してゐた間は長かつた。ぢきに三十年にもなるかと思ふ。それくらゐの間、一緒に暮してゐると、相手のことが氣にかからなくなる。相手はゐないのと同じやうに思ふことがある。良人ばかりでなく、一枝もまた、自分はひとりで暮してゐるやうに思ふことがある。良人の氣持を構はず、自分のしたいと思ふことを平氣でしてゐることがある。

二人が一緒に暮してゐた間、一枝は絶えず良人のことを氣遣ひ、良人の喜ぶことばかりをしてゐた、やうに見えた。さうすることは一枝にとつて氣持の好いことであつた。しかし、よく考へて見ると、一枝は何かするとき、決して相手の心の方になつてすることはなかつた。いつでも、自分の方から考へて、それが氣持の好いこ

と、面白いこと、愉しいことである場合を、自分では意識しないで、さう言ふ場合ばかりを撰つてゐたやうに思はれる。良人の喜ぶことをしてゐたのは、それが面白いからであつたやうに思はれる。相手に氣に入るやうなことをする場合、一枝にとつてはそれが愉しいことなのであつた。自分の方から考へて、それが愉しいのであつた。いまになつて考へると、それは一種利己的な喜び方であつたと思はれる。

あれは戰時中のことであつた。熱海に疎開してゐたが、町に近い家であつたので、いつここもやられるかも知れない、と言ふ話であつた。あの小さな溫泉町が狙はれてゐるとは思へないのに、その頃はさう言ふ噂であつた。どこか、もつと邊鄙なところへ越したい、さう思つてゐたときに、こんな話をした人があつた。熱海からさう遠くないところに、低い山があつて、その頂上に一軒の別莊がある。或るもの好きな人の建てた家だ。但し、水が引いてないので、水は雨水を溜めておくか、谷あひの川まで汲みに行くかしなければならない。それを承知なら貸しても好い、と言ふ話であつた。

一枝は一度若いときに、山の小屋で暮したことがある。やはり、谷あひの川まで下りて水を汲んだ。それは可厭なことではなかつた。寧ろ、愉しかつたと言ふ記憶がある。一枝は良人にその話をして、一緒に家を見に行つた。山は思つたほど高くはなかつた。頂上の木の間がくれに、その家の屋根と雨戸が見える。それはすぐ近いやうでもあるが、遙か上の方であるやうにも見える。「あんなところに越せると思ふかい。」良人は呆れたやうに言ふ。「それに、谷まで水を汲みに行くなんて、出來ると思ふかい。」「あら、あたしが汲みに行くのよ。」と一枝は言つた。少しは不便でも、危險のないことが何よりだと思はれたが、良人にはその氣がなかつた。

一枝はそのときのことを、いまでも思ひ出す。ひよつとしたら一枝は、いつでも相手の喜ぶことをしてゐる積りで、多少は氣に入らないことでも、氣がつかずにしてゐたとも思はれる。はつきりと氣に入らないと言はれても、それでやめて了ふのが、いかにも惜しい氣がしたのを忘れない。

いつでも一枝は、何か思ひつくことがあると、そのことが酷く愉しいことのやう

に思つて了ふ癖がある。山の上の家で、谷あひの川まで水を汲みに行くと言ふことも、ちよつとの間は面白くても、ながい間には厄介と思ふやうになるかも知れない。良人の言つたことは、ひよつとしたらその通りであるかも知れない。それでも、良人がまともに反對しなかつたら、やはりその家に越してゐただらう。いまになると一枝も、自分の癖を笑つて了ふことが出來るけれど。

しかし一枝は、相手がなく自分ひとりで出來ることは、何でも思ひついたことをそのままして了ふ。山の上の家に越さないで、一枝たちは熱海から良人の田舍の栃木の在へ越して行つた。荷物は鐵道便で送つて、良人だけさきに田舍へ行つた。一枝はあとに殘つて、細かい物を片附けた。闇で買つた胡麻油があつた。表立つて送ると沒收されるかも知れない。一枝はその油を入れた石油罐を大きな風呂敷に包み、それを背中に背負つて、熱海から汽車に乘つた。戰爭も末期に近い頃だつた。汽車は無蓋の汽車で、人が鮨詰めになつて乘つてゐる。あれは品川の驛の近くだつた。空襲だと言ふので、汽車が停つたことがある。空襲なら、早く走つて行つた方が宜

いのではなかつたかと思はれたが、しかし汽車は停つた。パリパリと音がして、燒夷彈が落ちた。しかし、汽車には當らなかつた。

あとで考へると、よく彈が當らなかつたと思ふ。無蓋の汽車だから、狙はれると簡單に當る。背中に油を背負つてゐるから、彈が當つたら體中に火が燃え移る。自分だけでなく、一緒に乘つてゐる鮨詰めの人たちにまで燃え移る。一枝のすることは、いつでも、ここまでは考へられない。ただ、田舍に疎開してゐる人に、油を入れたものを食べさせたい。食べさせて喜ぶ顏が見たい。ただそのことだけを考へて、あとは考へなかつた。

栃木の田舍へ行つても、一枝は食べ物を見つけに、百姓家を歩いた。をかしなことであるが、一枝は食べ物を見つけるのが巧かつた。また、それが面白かつた。それまでに持つてゐた着物や洋服を、食べ物に替へた。そんなことは誰でもした。しかし一枝は大きな荷物を背負つて、田舍道を歩いてゐる間に、たびたび小さな空襲に出會つた。近くに兵營があつたので、ときには一二機の敵機が地面から十メート

ルくらゐのすれすれのところまで降りて來ることがあつて、乘つてゐるアメリカ兵の顏がはつきり見えることもあつた。「歩いてゐるね、ほら、機銃でお見舞しようかね、」とふざけて言つてゐるやうに思はれたりした。さう言ふときにも一枝は、へんに恐くなかつたのを覺えてゐる。なぜ、恐くないのか。それは分らない。ひよつとしたら、さう言ふとき、相手は決して擊つて來ないものと思ひ込んでゐたのかも知れない。

田舍にゐる間、一枝はよく働いた。朝寢坊であつたのに、良人の父母が起きて來る前に起きることが出來た。それは不思議であつた。ひよつとしたら良人の父母は、一枝の起きるまで寢床で待つてゐてくれたのかも知れない。へつつひに火をつけて、味噌汁を炊いた。まだ、はつきり明けてゐない庭に霧がおりてゐる。一枝は自分で集めて來た材料で、飯の支度をする。一枝の作つたものは旨い。良人の父母も良人も旨いと言ふ。一枝にはそれが愉しくてならないのである。だから、をかしなことであるが、戰爭は一枝にとつて苦しいと言ふ思ひ出ではなく、愉しかつたと言ふ氣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c